

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名 友成 有紀

文法学を学ぶ目的・意義 (prajojana) は何かという問いをめぐっては、パーニニ文法学派内において、すでに大注釈者パタンジャリ (前2世紀) が著した『マハーバーシャ』に、かなりまとまった議論が見られ、5世紀頃に活躍した言語哲学者バルトリハリにもその後の議論の発展の跡が伺われる。さらにこのトピックは、サンスクリットの正しい発音や言葉遣いの伝統をめぐる議論などへと発展し、パーニニ文法学派の枠を越え、ヴェーダ聖典解釈学派 (ミーマーンサー) およびインド論理学派 (ニヤーヤ) の文献にも、文法学の存在意義を否定し、パーニニ文法学の諸理論の不備を批判する執拗な反対主張と、それに対するヴェーダおよびサンスクリットの権威を擁護する側からの応答からなる詳細な論争として収録されている。こうした議論の存在自体とその概要は、先行研究である程度は明らかにされていたが、該当資料を掘り下げ、議論内容を具体的に踏み込んで分析する研究は皆無に近かった。

そうした状況を踏まえ、9世紀末にカシミールで活躍したニヤーヤ学者ジャヤンタの著『論理の花房』(NM)の第六章後半部を基本資料として、そこに展開する上述の論争の全容を、その議論構造とともに明らかにしたのが本論文である。6章(第1章は序、第6章は結論)からなる第一部本論(60頁)と、基本資料の訳注研究である第二部(100頁)から構成されている。

NMは哲学文献としては相当に難解であり、特に本論文が基本資料とした箇所への解説には、パーニニ文法学およびミーマーンサー学に関する高度に専門的な知識が必須となる。信頼に足る翻訳も解説もない中で友成氏は、こうした困難さを見事に克服して、的確なシノプシスを第2章で提示し、文法学批判を展開する前主張部を10の論難事項に整理した上で、その後に関定説部を各論難に対する一連の応答として分析することに成功した。

さらに友成氏は、先行するミーマーンサーの関連資料との対応関係に切り込む形で、このNMの議論分析を深化させている。ジャヤンタがクマーリラ(7世紀)の著述に大きな影響を受けていることは従来から指摘されてきたが、第4章ではNMよりもさらに難解なクマーリラ作『タントラ・ヴァールツィカ』に見られる同種の錯綜した議論(文法学論題)の詳細なシノプシスを掲げ、かつNM中の論争の各論点との対応関係を図式的に明らかにした点も、高く評価される。またパーニニ文法学特有の術語規定の不備を指摘する、NM前主張部中の批判部分が、一般的にプラバーカラ(7世紀)の『ブリハティー』に対応箇所が見出されることは、友成氏が初めて指摘した点であり、これによってNMの、ミーマーンサー文献に対する依存度はさらに文献実証的に明らかとなった。

文法学批判を展開するNM前主張部の議論は、先行文献の対応部分と内容的に異なる点は少なく、にもかかわらず定説部の応答よりも詳細にジャヤンタが描出する背景として、当時のカシミールにおける、仏教に代表される反ヴェーダ的な思想潮流の動向や、文法学そのものの位置付けといった要因に言及した第3章の論述にも注目すべき成果が含まれている。

総じて、原典資料の内容分析や、関連資料との対応提示に関する精度はきわめて高い。焦点とすべき論点の掘り起しや、議論の展開がやや不十分であることなど、本論部分に若干の難点はあるものの、厳密でしかも達意の訳文によって名文家ジャヤンタの筆致を正確に描きとり、NM中の当該議論全体の構造を解明した本論文の価値を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。